

## 【プログラム】

フランツ・シューベルトは1797年ウィーンに生まれ、1828年ウィーンで亡くなりました。当時のウィーンは、他のヨーロッパ諸地域同様、厳しい政治状況下にありました。そんな中、シューベルトは幼い頃から楽才をあらわし、父と兄からヴァイオリンやピアノの手ほどきを受けます。持ち前の美声と音楽性が認められ、11才で宮廷児童合唱団員となりました。サリエリから作曲も習っています。

彼は、その、あまりにも短い生涯のうちに、音楽のほとんどすべてのジャンルを作曲しています。なかでも抒情的・流動的で、内容の深い歌曲のかずかずは、今も私たちの胸を打ち続けています。

### シューベルト／ ヴァイオリン・ソナタ イ長調 D.574

1817年に作曲されたヴァイオリンソナタです。いまだ少年であった作曲者が旺盛な創作力を見せていた時期の作品であり、複雑な転調を試すなど、初期の意欲作となっています。

シューベルトのヴァイオリン音楽は、ソナタに近いものは計5作しかありません。本作以外には、ヴァイオリンとピアノのためのソナチネが3曲、ヴァイオリンとピアノのための幻想曲があり、他には管弦楽との協奏作品があるくらいなのです。

小規模なヴァイオリンソナタであるソナチネ3曲を、ヴァイオリンソナタ第1番から第3番とし、本作を第4番として扱う場合もあるようですが、「二重奏曲」の形式枠に収まらず、従来のヴァイオリンソナタにあるピアノとヴァイオリンの力関係を変えようという作曲者の野心が現れている作品で、全体的に明るい曲調となっています。

第一楽章 アレグロ・モデラート 付点リズムの序奏に始まり、のびやかにメロディーがうたわれます。

第二楽章 プレスト 機知に富んだ軽快なスケルツォ。

第三楽章 アンダンティーノ 転調の妙にみちた、ゆるやかな曲。

第四楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ かけ合いの面白さ。華々しいコーダで終わります。

### シューベルト／ アルペジオーネ・ソナタ イ短調 D.821

アルペジオーネとピアノのためのソナタとして、1824年11月にウィーンで作曲された室内楽曲です。彼の円熟期のものと言えるでしょう。

本作は、弦楽四重奏曲「死と乙女」と同時期の作品であり、アルペジオーネが発明された翌年に作曲されました。おそらくは、アルペジオーネの演奏に通じていた知人ヴィンチェンツ・シュースターから委嘱を受けてのことと考えられています。作品がシューベルトの死後1871年に出版されるまでに、アルペジオーネ自体が愛好されなくなり姿を消していました。今日では、この作品はもっぱらチェロ・ソナタないしはヴィオラ・ソナタに編曲して演奏されています。また時折りコントラバスやギターがアルペジオーネの代役を果たすこともあるようです。

第一楽章 アレグロ・モデラート 冒頭のピアノによる憂いを帯びた魅力的なメロディがまず耳をとらえます。内面がゆれ動くかのように展開して行きます。

第二楽章 アダージョ 清らかな「リート」で始まりますが、やがて絶望の深さもただよいます。

第三楽章 アレグレット はかない幸福感を思わせますが、しだいに決然と困難に立ち向かい、さいごは昇華されてゆくかのようです。

…………… 休憩 ……………

## シューベルト／ ピアノ三重奏曲 第2番 変ホ長調 D.929

この曲は1827年11月の作曲とされ、歌曲集「冬の旅」や、後期3大ピアノソナタと言われる第19番、第20番、第21番が生み出された時期でもありますが、シューベルトの健康はすぐれなかったようです。しかし、頭痛とめまいに悩まされながらも、驚くべき余力で創作を進め、晩年の傑作群に加えていったとされています。

シューベルトらしい歌心に溢れ、また曲調や調性が途中で大胆に変化する点は、第1番とは異質であり、ドラマチックとさえ言える曲となっています。さらに時折り漂う寂寥感も、晩年のシューベルトならではの深淵を垣間見せるものとなっています。

シューマンは、この曲を「燃えさかる流星が激しい光を放ち、音楽界のあらゆるものの輝きを奪ってしまう」と評しました。

第一楽章 アレグロ ちりばめられたメロディーが、流動してやまず、劇的に変化してゆきます。

第二楽章 アンダンテ・コン・モート スウェーデンの作曲家ベルグによる歌曲「陽は沈みぬ」に影響された、民謡風なメロディを使っています。

第三楽章 (スケルツァンド)アレグロ・モデラート 親しみやすいメロディーのかけ合い。

第四楽章 アレグロ・モデラート 第二楽章に出て来たメロディーを、このロンドの中に再現させています。あたたかい明るさと、深い寂しさを感じさせる曲。



All Schubert